

### 1. 「樹木医の見た 雲南の暮らし」 —雲南懇話会・第7回 Field Work、2009年11月—

愛知県樹木医会会長、NHK文化センター講師『野外活動講座「巨樹・巨木林を訪ね歩く」』 渡邊 裕之

2009年11月、雲南省南部に住む少数民族を訪ねる第7回目のField Workに参加し、雲南大学の車で約800km走り各地の村々、ゴム園やバナナ園・ザクロ園そしてベトナム国境の街2箇所を訪ねた。その折に垣間見た彼らの暮らしや食べ物とその歴史を通して日本人のルーツを推測したり、現在の中国の格差社会の実態を見る機会も多かった。広大な中国、その一つの省のホンの片隅を覗いただけの一旅行者ですが、人々の暮らしと社会や自然環境（照葉樹林の現状、ユーカリ植栽の功罪他）などについて、私見も交えて紹介します。

### 2. 「白鷹の峰 ロプチン (KG-2) 6,805m・初登頂」 —ヒマラヤの東・カンリガルポ山群、2009—

神戸大学山岳会、神戸大学・中国地質大学(武漢)合同学術登山隊(日本側)隊長 井上 達男

21世紀の今日、地球上に未探検地域や未踏峰が林立していると言えれば多くの人が耳を疑うであろう。カンリガルポ(崗日嘎布)山群はヒマラヤの東、東南チベットに位置し、全長280Kmの山脈を形成している。私たちがロプチン峰に初登頂するまで、およそ30座を越す6000m級の未踏峰のどれ一つ登られていなかった。また、周辺にはまだ未探検の地が多くある。初登頂に至る23年間の努力と山群の美しい未踏峰の写真を紹介したい。

### 3. 「中国内モンゴル牧畜民の暮らし」 —中国とモンゴル国の国境の町エチナから—

千葉大学文学部准教授 児玉香菜子

エチナは内モンゴル自治区の最西端に位置し、モンゴル国と長い国境をもつ。このエチナには広大なゴビにその上流に降った降雪雨が河川となって流れ込むことで、オアシスが形成されている。広大なゴビに形成されたオアシスは東西、南北を結ぶ交通と軍事の要衝であった。現在、エチナにはエチナ=トルゴードと呼ばれるモンゴル族をはじめ、さまざまな出自をもつ人びとが住んでいる。エチナのモンゴル牧畜民の暮らしを「国境」の視点から紹介する。

### 4. 「アフリカ・ウガンダ国におけるネリカ (New Rice for Africa) の研究と普及活動」

独立行政法人 国際協力機構 専門家、日本沙漠学会 評議員 西牧 隆壮

アフリカでは近年コメの消費が都市部を中心に、一人当たり25kg/年と急激に増加しているが、生産が消費に追い付かず、その半数はアジアを中心とした国からの輸入に頼っている。アフリカのコメの増産が極めて重要なことを認識した我が国は、2008年に「アフリカ大陸でコメ生産量を10年間で倍増させる」との支援を打ち出した。その切り札の一つが、アジア稲とアフリカ稲の交配種である陸稲「ネリカ (New Rice for Africa)」である。ウガンダ国における農家の稲作栽培技術の特性を考慮した、ネリカの研究と普及の状況について発表する。

### 5. 「雲南タイ族の年代記」 —明朝末期の徳宏州 (雲南省西南部・ムンワン / 隴川) の物語—

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 教授 Christian DANIELS

雲南は、北の「チベット族文化圏」と南の「タイ族文化圏」をつなぐ位置にあります。「タイ文化圏」には東南アジア的要素が顕著ですが、現在のバンコクを首都とするタイ王国が中心の文化圏ではありません。タイ系言語を話す民族はタイ王国だけではなく、中国、ミャンマー、ラオス、ベトナム、アッサムなどにも広く分布しています。このことは、歴史上、これらの地域に、タイ系民族を中心とした小王国が数多く存在していたことに由来します。タイ族はチベット族と同じように自己の文字を使用しており、自己の立場から王国の歴史を書きとめた年代記を残しています。雲南西南部の徳宏州にあったムンワン(漢名;隴川)というタイ族の小王国は、中国とミャンマー両国の間接統治を受けていました。講演では、16世紀末、この王国で発生した事件を通じて、タイ族が自己の歴史をどのように理解していたかを紹介します。